慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	象徴的治療を求めて : キャサリン・ マンスフィールドの四つの庭
Sub Title	In quest of the symbolic cure : Four gardens of Katherine Mansfield
Author	遠藤, 不比人(Endo, Fuhito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.57, (1990. 3) ,p.212(63)- 229(46)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00570001-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

象徴的治療を求めて

——キャサリン・マンスフィールドの四つの庭——

遠　藤　不　比　人

(I) はじめに

三十四才で肺結核のために夭折したキャサリン・マンスフィールド(1888—1923)の晩年を考えるとき，この結核という病いが極めて重要な意味を持つことは間違いない。そこには，狭義の伝記的批評を超えた，作家の想像力と病気との相関という甚だ興味深い問題があるはずである。しかしながら，従来のマンスフィールド研究において，十分な議論がこの点に関してなされてきたとは言い難い。

この文脈で，最も示唆的な手掛かりを提供してくれる批評家は，スーザン・ソンタグである。ソンタグは，その著書 *Illness as Metaphor* において，結核，癌，梅毒などの深刻な病いが，様々な作家の想像力を様々な形で支配してきた次第を論証している。特に，今世紀の初頭まで死病として恐れられていた結核が，作家の想像力においていわく言い難い「穢れ」の象徴と化して，彼らの創作に深い影響を与えてきたことを，ソンタグは強調している[1)]。言い換えれば，結核が肉体の病いではなく，魂の「穢れ」の隠喩となって，作家の想像力に取り憑いてきたということである。

ソンタグは，その具体的な例として，キャサリン・マンスフィールドを挙げている[2)]。まさしく，この作家は，晩年，ソンタグの言う「隠喩としての病い」に呪縛された一人であった。夫のジョン・ミドルトン・マリーが述懐するように，マンスフィールドにあって結核とは，肉体の病いではなく，魂の病気，あるいは魂の穢れに他ならなかった[3)]。そう信じたマンスフ

ィールドが，現実的な治療を拒み続け，魂の浄化こそがこの病いの唯一の治療の方法だと確信していたことは，彼女の日記の記述などに明らかである。[4)]

ここでまず第一に強調すべきことは，晩年のマンスフィールドの想像力において，魂の穢れという意識が，経験による無垢の喪失という強迫観念になっていることである。つまり，マンスフィードにあって結核とは，失われた無垢の象徴，あるいは隠喩であったということである。確かに，多くの伝記作者が伝える結核発病以前のマンスフィールド像は，創作のために甚だ無造作に「経験」を求める奔放な女の姿に他ならない。この早熟な文学少女が，故国ニュージーランドを離れて，今世紀の初めのロンドンで余りに性急に求めた「経験」の代償が，流産，堕胎，淋病，そして結核であってみれば，晩年の失楽園的オブセッションは必然であったと言い得るだろう。[5)] 事実，ロンドンでのこの乱脈の時期をマンスフィールドは，自らの履歴の汚点と考え続けていた。[6)] 結核という病いは，この時期の経験が彼女の「無垢」に印した黒い汚点，呪うべき刻印であったに違いない。

このことは，マンスフィールドの書簡，日記に氾濫する独特の病気のイメージが明瞭に示すはずである。無垢の喪失という意識は，しばしば「楽園喪失」という聖書的，神話的イメージを喚起するが，マンスフィールドにあって無垢の穢れの象徴と化した結核も，様々な「楽園」あるいは「庭」のイメージとなって反復される。つまり，かかる象徴的意味を帯びた彼女の病いは，ある鮮明なイメージ——「穢れたエデン」，「蝕まれた庭」というイメージとなって，晩年のマンスフィールドの想像力を支配する訳である。そして，このように隠喩化された病いの治療も，同様に隠喩化，象徴化されねばならなかったはずである。別言すれば，無垢の穢れとしての病いの唯一の治療は，無垢の回復であったということだ。ここに，象徴的治療としての楽園回復という，マンスフィールドの晩年の想像力と創作を支配したオブセッションを見い出すことができる。

本稿の趣旨は，ほとんど "Eden-Complex" とでも言うべき頻度と意味をもって書簡と日記を満たす，「楽園」あるいは「庭」のイメージを手掛か

りに，晩年のマンスフィールドの内面の世界を探ることにある。この「庭」という語の持つ意味とその変奏には，この作家の呪われた晩年を理解する決定的な手掛かりがあるに違いない。そこには，作家の想像力と病いという，従来のマンスフィールド研究において，ほとんど等閑に付されてきた問題があるはずである。

（Ⅱ）追憶と無垢の庭

結核発病前のマンスフィールドにおいて，「庭」という語は，幸福と追憶のイメージに満ちていた。マンスフィールドにおけるエデンのイメージが，しばしばエグザイルのノスタルジーという文脈で議論される理由がここにある。[7] 伝記作者たちが "sexual adventure" と呼ぶ経験の数々に，結核発病前とはいえ，マンスフィールドは十分な代償を払っていたと言える。この時期，「経験」に疲弊していたマンスフィールドが，故郷を失われた楽園として追憶していたのは確かである。

この文脈で，ほとんど必ず引き合いに出される伝記的事実は，1915年，大戦に従軍するためにヨーロッパを訪れた弟との再会，そして彼の戦場での事故死である。彼が大陸に赴く直前に，二人が故郷への追憶に浸っていた次第は，この頃の日記の記述に明らかである。[8] マンスフィールドの意識の中で，芸術家の成熟には甚だ不都合なはずであった絶海の孤島ニュージーランドが，南の海の楽園に一変するのに，さほど時間はかからなかったようだ。

さらに重要なことは，自らが故郷に，いわばかなぐり捨ててきた無垢を，マンスフィールドがこの弟に見ていたということである。弟に対する尋常ならざる妻の愛に，いささか嫉妬してマリーが言うように，この青年は "a symbol and a part of that world of Innocence"[9] であったに相違ない。弟の死に際してのマンスフィールドの悲嘆に，意地の悪い解釈を加える批評家もいるが，[10] 彼女にとって，弟との死別は，無垢を体現する自らの分身の死を意味する象徴的事件であったと言い得るだろう。

この事件をきっかけにして，確かにマンスフィールドの生活態度は一変

した。「経験」の場であるロンドンは "a dangerous place—a plague spot"[11] として斥けられ，イングランドの田舎に "rural paradise" を見い出し，そこに夫と "innocent children"[12] として引き込もることに，彼女の熱意は集中することになる。この楽園は，弟のミドルネームをとって「ヘロン」と名づけられ，この時期の書簡で繰り返し言及される。この牧歌的な「庭」は，経験に疲れたマンスフィールドの心と軀を癒やす場であると同時に，故郷へのノスタルジーを満たす楽園であったに違いない。

現実的には，この楽園は南仏のバンドルに見い出されることになる。地中海に面した小さな "villa" を描写するマリー宛ての書簡は，この時期のマンスフィールドの楽園のイメージを典型的に示している。常に彼女のノスタルジーを刺激する海と島のイメージが，「庭」への愛着と混ざり合い，マリーに報告される。

> I wish you could see the winds playing on the dark blue *sea* today, and two big sailing vessels have come in & are rocking like our white boat rocked when you were here.... A tiny villa is close by with a painted front and a well on a petite source at the bottom of the *garden.* They are dream places.[13] (emphasis added)

> I think we ought to develop together—keep very close together... and make ourselves, on our *island,* a palace and *garden* and arbours and boats for you and flowery bushes for me.[14] (emphasis added)

> Oh God, this place is as far as New Zealand to me—as apart, as secret as much a place where you and I are alone and untroubled ——But so I dream....[15]

南仏に見い出したこの追憶と無垢の庭は，確かに，「経験」に疲れたマンスフィールドの心と軀を癒やすのに十分であったにちがいない。しかしながら，経験が彼女に与えた最も苛酷な懲罰——結核の発病後，この追憶の庭の意味は変質していく。そして，この病いの悪化に伴い，マンスフィールドの庭は，その意味を深く，深刻なものとしていくと同時に，単なるノスタルジーでは解決のつかない内面の問題を露呈していくことになるだろう。

（Ⅲ）蝕まれた腐敗の庭

現在，最も信頼すべきマンスフィールドの評伝の著者アントニー・アルパースによれば，彼女の右の肺に小さな病巣が発見されたのは1917年12月，その医師の勧めで，再び単身南仏に転地に向かったのが，翌年の1月7日であった。そして，その年の2月19日，マンスフィルドは，最初の喀血を経験する。この前後から，結核に対する彼女の恐怖と嫌悪は，一連の独特のイメージを伴って書簡に氾濫する。マンスフィールドの想像力にあって，「庭」とは「無垢」に対する彼女のオブセッションを反映する，最も偏執的なイメージであった。この無垢を穢す病いが，発病以後，蝕まれ穢れた庭のイメージとなって，書簡，日記に頻出するのは，先述の通りである。もはや，「庭」という語は，ノスタルジーに満ちた幸福なイメージではあり得ない。彼女の肺と同様，マンスフィールドの庭も，徐々に病み，朽ち果てていくのである。

オックスフォード版の『マンスフィールド書簡集』の編集者ヴィンセント・オサリヴァンは，この時期の書簡について興味ある指摘をしている。結核菌によって自らの肺が蝕まれていくという生理的恐怖のために，「食いつくす」「食い荒す」という言葉がこの頃の書簡に反復されるという指摘である。[16] 彼の言葉を借りれば，その時々の嫌悪の対象が“devouring insects”となってマンスフィールドの肺を「食い荒す」ことになる。このヒステリックな嫌悪の対象は，様々な不如意を味わい，そして弟を奪った戦争であり，あるいは，当時献身的な看病をしていた友人のアイダ・ベイ

カーとなる。

[E]verything is poisoned by it [the war]. Its [sic] *here in* me the whole time, eating me away....[17] (original emphasis)

I even go so far as to feel that she [Baker] has pecked her way into my wing to justify her coming, which *is* cruel I know.[18] (original emphasis)

引用 (18) における "wing" とは，肺を意味するマンスフィールドの secret word の一つである。そして，もう一つ肺を示す言葉に "battle field" がある。この「戦場」において，病巣は，徐々にかつ確実に，進行し拡大していくだろう。

「無垢」を保障するはずであったマンスフィールドの庭も，この病気のイメージから逃れることはできない。恐怖と嫌悪に満ちたこの病人の目には，転地先のフランス人が，庭を荒らす「雑草」と映じる。

But I do find the french [sic] language, style, attack, point of view, hard to stomach at present. Its [sic] all *tainted*... once they [French people] are in your garden they spread & spread—and make a show, perhaps, but they are weeds.[19] (original emphasis)

「庭」を荒らす雑草のイメージは，病気，腐敗を反映するマンスフィールドの最も強迫的かつ偏執的イメージである。原文でイタリック体の "tainted" は，確実に，そのイメージを強調している。さらに，このイメージは，やはり病気と腐敗の主題に貫かれたテクスト *Hamlet* における，ハムレットの第一独白を連想させる。

O that this too too sullied flesh would melt,
Thaw and resolve itself into a dew,

Or that the Everlasting had not fix'd
His canon 'gainst self-slaughter.
O God! God!
How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world!
Fie on't, ah fie, 'tis *an unweeded garden*
That grows to seed; things rank and gross in nature
Possess it merely.[20] (emphasis added)

父の死の直後，叔父と再婚した母親に，ハムレットは腐敗と堕落を直観する。自らの肉体を "too too sullied flesh" と見たハムレットにとって，母親の堕落は彼自身の肉体の腐敗と同じであった。"an unweeded garden" は，確実に，彼の穢れた肉をも暗示している。この腐敗のイメージが，ハムレットの意識において，先王なきあとの国全体にまで拡がるのは周知のところである。引用したアーデン版の編集者ハロルド・ジェンキンズの指摘を俟つまでもなく，この第一独白は，劇全体の重大なモティーフ—「病気」「腐敗」を本格的に導入する箇所となっている。[21]

オサリヴァンの示唆する病気のイメージ—「食い荒らす」は，マンスフィールドの無垢の聖域，「庭」をも蹂躙する。D. H. ロレンス夫妻に対する憎悪に激する時，書簡になぐり書きされるのは次のような言葉だ。"My garden is too small and they [the Lawrences] eat up all ones [sic] plants—roots and all."[22]

かかるヒステリックな病人の悪態の底に是非とも見なければいけないのは，結核が無垢の庭を穢す鮮烈なイメージと化していることである。それと同時に，病いが外部の世界に対する憎悪にすりかえられたということも見逃してはなるまい。その結果，「庭」の内部の「無垢」は執拗に強調されることになる。この外部への呪詛と，庭の内側の無垢の強調は，次の引用において典型的である。このマリー宛ての書簡では，彼らこそ人類唯一の無垢な子供となる。

My grown up self sees us like two little children who have been turned into the garden.[23)]

Oh, a plague on human beings, only you and I are really the right kind.[24)]

Hate life more than ever—see MORE CORRUPTION every day—& everybody seems to be evil & vile.[25)]

マンスフィールドにおける子供のイメージと無垢への偏執は，しばしば，彼女の精神的未成熟 "adult infantilism"[26)] と見なされがちである。しかし，病いという文脈で考えた時，かかる無垢への執着は，病気に対するマンスフィールドの嫌悪と拒絶を示すはずだ。

しかしながら，「穢れ」の隠喩としての結核が，決して外部からではなく，内側から自らの無垢を蝕み始めたということは，否定のしようもなかったに違いない。発病から一年半近くたった1919年10月の書簡では，結核はもはや隠喩にとどまらず，極めて鮮明な映像を結ぶ。

Oh, it is agony to meet corruption when one thinks all is fair—the big snail under the leaf—*the spot in the child's lung*—what a *wicked, wicked* [sic] God![27)] (emphasis added)

確かに，マンスフィールドの想像力にあって結核とは，無垢な子供の肺に印された呪うべき「経験」の刻印であり，消しようもない「汚点」であったに違いない。

この腐敗し始めた楽園—マリーとの無垢の庭—は，その後放棄される。この "rural paradise" への逃避が，弟の死に，無垢な分身の死を見たマンスフィールドの復楽園的試みであったことは，すでに述べた。より深刻に，そして致命的に無垢の喪失を宣告する病いに直面した時，マンスフィ

ールドは，この庭への逃避を児戯に類したことだと否定する。

> [Murry and I] bind ourselves within a ring and that ring is as it were a wall against the outside world. It is our refuge, our shelter....
> Why, I talk like a child![28]

結核が末期に近づいた1921年8月の『日記』のこの記述には，マリーとの結婚生活のあり方を内省するマンスフィールドがいる。伝記作者たちは，そこに，マリーの妻に対する不誠実と，夫に対する彼女の失望を読み込む[29]。しかし，そういった伝記的事実の詮索よりも本質的な問題が，この記述の行間にあるはずだ。病いが，もはや外部への嫌悪にすりかえられるものではなく，自己の内部の腐敗であることを認めたマンスフィールドの目は，確実に内側に向けられていくはずである。これ以後，ヒステリックな庭への逃避は，"child love"[30] と否定される。ここに，病いの象徴的治療を求めるマンスフィールドの晩年が，本質的な意味で始まったと言ってよい。

(Ⅳ) 浄化された記憶の庭

マンスフィールドの病いの象徴的意味を考えるためには，彼女のもう一つの key word である「腐敗」—"corruption" を吟味しなくてはならない。これまでの引用に明らかなように，この語は結核発病後，最も頻出する言葉の一つである。引用 (25) で示されるように，この単語は，まず第一に，"moral deterioration" を意味する。それと同時に，引用 (27) では，"the spot in the child's lung" と同格に用いられ，自分自身の病いを意味するのは明らかだ。*O. E. D* は，二番目の語義として，現在では廃義になった "Infection, infected condition" という意味をこの語に与えているが，マンスフィールドの語彙においてそのニュアンスは生き残っているようだ。さらに，この単語の "the destruction by disintegration" という意味は，肺が徐々に腐敗し朽ちていく生理的恐怖を正確に表現して

いると言わねばならない。

確実に "corrupt" していく肺は，マンスフィールドに自己の記憶のなかの "corruption" ―― 若き日の「道徳的堕落」を想起させずにはおかない。1920年10月のマリー宛ての書簡には，彼女の悪夢が報告されている。その夢とは，彼女がひたすらに「経験」を求めたロンドンの灰色の風景であった。

> The sky was asy-green.... A very fine soft ash began to fall.... A cart drawn by two small black horses appeared. Inside there were Salvation Army women doling tracts out of huge marked boxes. They gave me one!
> 'Are you corrupted?'[31)]

この救世軍の女性の言葉 "Are you corrupted?" の意味は，前の日のマリー宛ての書簡でより明らかになる。そこには，自らの "experience" を "waste" "sin" "destruction" と言わざるを得ないマンスフィールドがいる。

> I've *acted* my sins, and then excused them or put them away with 'it doesn't do to think about these things' or (more often) 'it was all experience.' But it hasn't ALL been experience. There IS waste—destruction, too.[32)] (original emphasis)

この書簡においてマンスフィールドは，自らの経験を "corruption" とも言い得たはずだ。"corruption" という一語のもつ意味とその多義性は，確実に，マンスフィールドにおける病いの意味を明らかにしている。マリーは，ロンドンでのこの時期を記録する『日記』の原稿の多くが破棄されていると言っている。[33)] この原稿の破棄は，言うまでもなく，自らの無垢を穢す「経験」という汚点を消し去ろうとする試みに他ならない。それと同時に，そこには，無垢の穢れの隠喩と化した自らの病いに対する象徴的治

療の意志がありはしないか。結核発病以前は，牧歌的な庭への逃避で事足りたマンスフィールドの楽園回復が，第二の「失楽園」に終ったことは，すでに述べた。この時期から，より本質的な意味で「経験」に汚されていない「無垢」の回復，奪還が始まる。

かかる視点に立つ時，マンスフィールドの目が自己の内部へ，すなわち過去の記憶へ向けられるのは，必然的なことに思える。1920年4月の『日記』の記述には，「経験」の及ばない「無垢」を記憶のなかに求めるマンスフィールドがいる。

> Is it possible that the rage for confession, autobiography, especially for *memories of earliest childhood*, is explained by our persistent yet mysterious belief in *a self which is continuous and permanent; which, untouched by all we acquire and all we shed*, pushes a green spear through the dead leaves and through years of darkness...? (emphasis added)[34)]

イタリック体で強調しておいた三つの箇所が意味するのは，無論，エグザイルのノスタルジーでも，死の恐怖による過去への退行願望でもない。マンスフィールドの "memories of earliest childhood" に対する執着は，自己の内部にあるはずの "a self... untouched by all we acquire" ——すなわち「経験」に汚されていない「無垢」への確信に他ならない。したがって，マンスフィールドにおける過去への退行は，自己浄化の過程であるはずだ。幼年時代の無垢な自己を再構成，つまりは，それを創作の対象にすることは，創作による自己浄化，自己治療の試みであると言い得る。

創作のもつこの意味は，1920年10月の『日記』の記述でより明白になる。創作のメモを書いた後，それを作品に完成させない自責の念を告白するこの箇所は，マンスフィールドの内面を露呈させている。

> My chief fault, my overwhelming fault is *not writing it out.*

Well, now that I know it (and *the disease* is of very long standing) why don't I begin, at least, to follow *a definite treatment*? Is it my experience that when an "*evil*' is recognised, any delay in attempting to *eradicate* it is fatally weakening. And I, who love order, with my mania for the 'clean sweep'.... I to know there's such *an ugly spot* in my mind! *Weeds* flourish in neglect. I must keep my *garden* open to the light and in order.[35] (emphasis added)

"writing it out" の "out" という副詞を「最後まで，完全に」と解釈すれば，この箇所の意味は「書いてしまう」になる。しかし，それと同時に，ここには「書いて外に出す」という意味が重なっているように思える。それは，"writing it out" と "eradicate" の文脈上の連がりから明らかである。さらに重要なことは，"not writing it out" が "the disease" と同格に用いられていることである。創作に対する怠惰を自責する強い言葉であると，この語を読むことはもちろん可能である。しかし，その一方，この "the disease" を引き継ぐ "evil" "spot" "weed" のマンスフィールド的意味を考える時，この語には字義通りの意味が含まれていることは明白だ。引用後半で語られていることは，病いに対する自らの姿勢に他ならない。結論から先に言えば，マンスフィールドにあって創作とは，自己の内部にある病いを「書き出し」「根絶させる」治療の試み——"a definite treatment" である。もし，その病いの原因が記憶のなかの "corruption" にあるとすれば，それは創作によって "eradicate" されねばなるまい。晩年のマンスフィールドにおける創作の意味は，この二つの引用で明らかになる。彼女にあって創作のもつ倫理的（もしこう言ってよければ，医学的）意味は，記憶のなかの「汚点」の浄化と，その汚点が及ばない幼年時代の再構成にあるのだ。さらに言えば，マンスフィールドにとって，記憶に蘇る故郷は，浄化された無垢の楽園であるべき存在のはずだ。

しかしながら，彼女の記憶のなかの故郷は，純粋に無垢な楽園ではあり

得なかった。そこには，「経験」を求めて故郷と両親を軽蔑憎悪する少女時代の自分がいるはずだからである。この時期を創作の対象に選ぶとすれば，「庭」におけるこの「雑草」は "eradicate" されなければならない。同時に，完全に無垢な時代——"earliest childhood" は，徹底的に理想化される必要があるだろう。

マンスフィールドのかかるアムビヴァレントな過去への態度は，そのまま作品のなかの二人の登場人物となる。"Prelude" (1917) と "At the Bay" (1921) に登場する，ベリルとケザイアがそれである。前者に，作者の "rebellious womanhood" を，後者に作者の幼年時代の "an idealised version"[36] を見ることが可能である。

ここで注目すべきは，結核発病以前の作品 "Prelude" と，病いが末期に近づいた1921年執筆の "At the Bay" には，本質的な相違があるということである。"Pre ude" におけるベリルの心理の中心は，この楽園というべき作品世界からの脱出願望に終始する。この人物の性的な経験に対する渇望は，彼女がもて余す豊かな頭髪と，成熟した白い腕というイメージによって，極めてエロティックに描かれる。そして，もし彼女の脱出願望が実現したら，そのままロンドンでの作者等身大の姿になると考えざるを得ない人物と言える。これを読者の放恣な空想と断じ得ない程の自伝的要素が，濃密にこの登場人物にはある。

マンスフィールドの死の二年前の作品である "At the Bay" においては，このベリルに楽園からの脱出の機会は，ほとんど与えられる。月光（マンスフィールドにおいて月は常に性的なイメージである）に照された「庭」の外から，誘惑者はベリルに呼びかける。その手に導かれて，ベリルが庭を者る寸前，この「庭」は擬人化される。

> What was she doing? How had she got here? *The stern garden* asked her as the gate pushed open.... (emphasis added)[37]

ここで「庭」は，もしこう言ってよければ，作者は，ベリルの堕落を極

めて「厳格」な表情で阻止する。ここに，作者の象徴的な楽園回復を見ることは十分可能である。"At the Bay" のこのエンディングにわれわれが読み込まなければならないのは，記憶のなかの "ugly spot" を "eradicate" しようとする作者の試みではないだろうか。晩年のマンスフィールドにあって，過去を書くことは，記憶を再構成し浄化することに他ならなかったはずである。"At the Bay" において浄化された記憶は，彼女の無垢を保障する内面化された「庭」であると言い得るだろう。確かに作者は，この「庭」のなかの無垢を守り切ったのである。この作品を執筆中の1921年9月の書簡で，マンスフィールドが "efface myself" と語り，"At the Bay" を "a continuation of 'Prelude'"[38] と言った意味もここにあるはずだ。

あるいは，1920年10月の書簡で，彼女が語っているのも，まさしく同じことである。

> We only live by somehow absorbing the past—changing it. I mean really examining it and dividing what is important from what is not (for there is WASTE) and transforming it so that it becomes part of the life of the spirit and we are free of it.[39]

過去を "transform" することによって，その過去から解放されるべきだと語るこの引用は，晩年のマンスフィールドの創作の意味をよく示している。彼女にとって創作とは，自己の内部の "corruption"—「穢れ」を浄化する象徴的な治療に他ならないからである。

しかし，自己浄化，象徴的治療としての創作が，現実の病いには無力であるという合理的判断がマンスフィールドになかったはずはない。かつて，マリーとの「庭」を放棄しなければならなかったように，マンスフィールドがこの記憶のなかの「庭」からも出なければならなかったのは必然であった。眼前に迫る死に直面して，マンスフィールドは，最後の「庭」を治療の場として捜し求めなければならなかった。

(V) フォンテーヌブローの庭

マンスフィールドが試みた唯一の現実的な治療は，"a nonsensial process of irradiating the spleen with X rays"[40] であった。1922年1月に始めた，このX線による治療に絶望した後，マンスフィールドは再び魂の治療—"salvation in mysticism"[41] を求める。彼女の最後の治療の場は，当時，多くの知識人の間で少なからぬ影響のあった宗教団体—グルディエフ協会であった。手短かに言えば，肉体と精神の調和にこそ人間本来の健全な状態があるとする[42]グルディエフの哲学を，マリーは「オカルト」と一蹴したが，病状が絶望的に進んだ患者の目には，それは奇跡に見えたに違いない。この団体に入会するために，マンスフィールドがフォンテーヌブローに赴いたのは，1922年10月10日であった。

しかし，このフォンテーヌブローは，マンスフィールドの第二のエデンにはなり得なかった。死の直前の12月25日のマリー宛ての書簡で，マンスフィールドは，未だ悔い改めない "old Adam" ならぬ "old Eve" を自らに見ている。

> You see, Bogey [Murry], if I were allowed one single cry to God, that cry would be: I want to be REAL. Until I am that I don't see why I shouldn't be at the mercy of old Eve in her various manifestations for ever.[43]

1923年1月9日，このフォンテーヌブローは，マンスフィールドの最後の「庭」となる。晩年の五年間，治療の場を求めて，南仏，イタリア，スイスと転々とした彼女の最後の土地は，このフォンテーヌブローであった。そして，象徴的治療としての楽園回復を求め続けたマンスフィールドの内面の風景にあった最後の「庭」も，このフォンテーヌブローであった。

繰り返し言えば，マンスフィールドの「庭」は，自己浄化という彼女の晩年の道行きにあった内面の風景に他ならない。創作とは，自己の内部に

ある穢れを浄化する自己治療の行為であった。そこには，「隠喩としての病い」に呪縛されたこの作家の必死の倫理の形式があったと言うべきだろう。それと同時に，晩年におけるこの作家の故郷回帰は，病いに汚されていない自らの「無垢」を奪回，回復する試みであった。かかる視点に立つ時，われわれは，ノスタルジックな珠玉の短編の名手という像とは，かなり違った作家の姿と姿勢を，キャサリン・マンスフィールドに見い出すことができるはずである。

註

1） Susan Sontag, *Illness as Metaphor* (Now York: Penguin, 1983), p. 63.

2） Sontag, pp. 50-51.

3） Katherine Mansfield *Journal of Katherine Mansfield 1904-1922*, "Definitive Edition," ed. J. M. Murry (Auckland: Hutchinson, 1984), pp. 316-317. 参照。

4） 例えば，*Journal*, pp. 288-289; p. 265. 参照。

5） マンスフィールドの伝記的事実は，次の研究書を参考にした。 Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (New York: Viking, 1980); Jeffrey Meyers, *Katherine Mansfield: A Biography* (New York: New Direction, 1980); Claire Tomalin, *Katherine Mansfield: A Secret Life* (New York: Viking, 1987).

6） *Journal*, pp. ix-x. におけるマリーの回想を参照。

7） こういった一般的議論をする批評家は枚挙にいとまはないが，例えば，C. A. Hankin は，マンスフィールドの故郷回帰の意味を，自責の念による故郷との和解という文脈で考えている。 C. A. Hankin, *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories* (London: Macmillan, 1983), p. 101, 209, 222. 参照。あるいは，Andrew Gurr は，この問題をエグザイルにおける identity 獲得という視点で論じている。Andrew Gurr, *Writers in Exile: The Identity of Home in Modern Literature* (Sussex: The Harvester Press, 1981), p. 49. いずれの評家も，病気という視点が欠落している。

8） *Journal*, pp. 83-89. の記述を参照。

9） John Middleton Murry, *Katherine Mansfield and Other Literary Studies* (London: Constable, 1959), p. 83.

10） 例えば，Meyers は，妻の愛情に十分に答えられない夫マリーに対するマンフィールドの一種の "あてこすり" をここに見ている。さらに，Meyersは，マンスフィールドの悲嘆に，ある種の自己劇化を見る Aldous Huxley の意

見を紹介している。Meyers, pp. 121-122. 参照。

11) Gillian Boddy, *Katherine Mansfield: The Woman and the Writer* (Victoria: Penguin, 1988), p. 125. に引用された1922年3月21日付け，アイダ・ベイカー宛の書簡参照。

12) Tomalin, p. 167.

13) 1915年12月22日付け，マリー宛ての書簡。Katherine Mansfield, *The Collected Letters of Katherine Mansfield*, ed. Vincent O'Sullivan, I (Oxford: Clarendon, 1984) p. 223. この書簡集は以降 *Letters* I と略記する。

14) 1915年12月19日付け，マリー宛ての書簡。*Letters* I, p. 220.

15) 1915年12月29日付け，マリー宛ての書簡。*Letters* I, p. 239.

16) Vincent O'Sullivan, "Introduction" in *The Collected Letters of Katherine Mansfield*, ed. Vincent O'Sullivan, II (Oxford: Clarendon, 1987), pp. viii-ix. 参照。この書簡集は以降 *Letters* II と略記する。

17) 1918年2月3日付け，マリー宛ての書簡。*Letters* II, p. 54.

18) 1918年2月20日付け，マリー宛ての書簡。*Letters* II, p. 83.

19) 1918年2月27日付け，マリー宛ての書簡。*Letters* II, p. 95.

20) Harold Jenkins, *Hamlet*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1982), I. ii. 129-137.

21) *Hamlet*, p. 437. "Longer Notes" 参照。

22) 1919年4月7日付け，S. S. コテリアンスキー宛ての書簡。*Letters* II, p. 309.

23) 1918年1月27日付け，マリー宛ての書簡。*Letters* II, p. 46.

24) 1919年10月3日付け，マリー宛ての書簡。*Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry*, ed. J. M. Murry (London : Constable, 1951), p. 315. 以降この書簡集は，*Letters to Murry* と略記する。

25) 1918年6月3日付け，アイダ・ベイカー宛ての書簡。*Letters* II, p. 218.

26) Nairman Hormasji, *Katherine Mansfield: An Appraisal* (London: Collins, 1967), p. 89.

27) 1919年10月20日付け，マリー宛ての書簡。*Letters to Murry*, p. 344.

28) *Journal*, p. 259.

29) 例えば，Alpers, p. 278; Tomalin, p. 194; Meyers, p. 191; Hankin, p. 165. 参照。

30) *Journal*, p. 184.

31) 1920年11月1日付け，マリー宛ての書簡。*Letters to Murry*, p. 582.

32) 1920年10月31日付け，マリー宛ての書簡。*Letters to Murry*, p. 578.

33) *Journal*, p. ix. におけるマリーの記述を参照。

34) *Journal*, p. 205.

35) *Journal*, p. 221.

36) Hankin, p. 131.

37) Katherine Mansfield, *The Stories of Katherine Mansfield*, ed. Antony Alpers (Auckland: Oxford Univ. Press, 1984), p. 469.

38) 1921年9月付け，ドロシー・ブレット宛ての書簡。Katherine Mansfield, *The Letters of Katherine Mansfield*, ed. J. M. Murry, II (London: Constable, 1928), p. 134.

39) 1920年10月30日付け，マリー宛ての書簡。*Letters to Murry*, p. 577.

40) Alpers, p. 300.

41) Meyers, p. 244.

42) この協会の詳細な説明に関しては，Alpers, pp. 365-375. 参照。

43) 1922年12月25日付け，マリー宛ての書簡。*Letters to Murry*, p. 697.

本稿は，1989年度提出の修士論文の第一章を邦訳，かつ補筆，修正したものである。